

はじめに

前号に引き続き、神奈川県藤沢市辻堂茂兵衛資料館所蔵の和讃資料の翻刻紹介を行う。全体像については『立教大学大学院日本文学論叢』第十一号(二〇一一年八月)に目録 **資料A** を掲載したので参照されたい。今回は目録で「生活・時事」に分類した45〜55までの和讃を対象とする。

【翻刻凡例】

- 一、目録番号45〜55の順に配列した。
- 一、一冊に複数収録されているため、原態をとどめるよう、以下の手順で表記した。

- ・一冊の外題：**1 観音経**

- ・収録された和讃の内題(表記がない場合は「」)：〔観音経〕
- ・各編の和讃の通し番号：【 1 】

- 一、翻刻は追い込みとしたが、読解の便を考慮し、適宜、句ごとの字空け・改行を行った。

- 一、翻刻はすべて表紙(二丁オ)から行なった。

- 一、白紙の丁がある場合は、「本文ナシ」と表記し、絵が描かれている場合には「」に略記した。

- 一、丁が変わる際は(一オ)のように表記した。

- 一、句読点は省略し、旧字は新字に改めた。

- 一、口伝の影響による訛りはそのまま表記し、誤記、誤写と思われる箇所には(ママ)を付した。

- 一、判読できない字は□とし、推定できる場合は **あ** のように表記した。

45 お茶和讃

お茶和讃【77】

大正八年一月 お茶和讃 石井たか女(一オ)〔本文ナシ〕(一ウ)き
ちみやうちよらい たちよりにて おちやのくどくに みおやすめ お
ちやおほどこすおんゑにわ かうちやうきうちゑあいきう(二オ)
一にうちのちや 二にするが 三にあしくぼ 四にうこん 五ぜんに
あがりしおちやなれば 六ねおきよめてすぐやかに(二ウ) 七日七や
のふぢようけす 八にじめうおのべたもう 九のつこのちやでこゝち
よく 十からちそうになりたもう(三オ) いろもかもよいせんぢちや
の
きめぬこゝろのうすからん

お茶のおれい【78】

お茶のおれい(三ウ) きみやうちよらい ありがたや ふしぎなごゑ
んでこしやすめ 十七八のむすめごが きんぎんちやわんで おちや
をだし おちやは(四オ) なによとみてあれば しんちやか こちや
か うちのちやか たゞしは おいへのおてせいか たびのつかれで
のみしれず おくのおやまの(四ウ) おゝてらの やまぶきいろにも
さもにたり おちやのおれいに にほひぶくろにはなまもり なにと
なに ねんぶつもうしのことなれば 六じのみよう(五オ) おいて
たつ なむあみだぶつ あみだぶつ

せんだうねんぶつ【79】

せんだうねんぶつ(五ウ) きめうちよらいせんどしゆの ゆかたの

もようをみてあれば かたにほをあげ すそになみ いかりとゆうじ
を もんにかき(六オ) 申もしもこのこがせんどしゆの こなら 「さ
をでさんねんろで みつきをもちじとりかじや むねにある 「あだ
なふかがわ(六ウ) ちよきでゆくどこのかしはへ つけたとていかり
をろせば ながりやせぬ(七オ)

〔御詠歌〕【80】

うづもれし みだのいほりも よにいでゝ ちかひたがはぬ たりき
ほんぐわん(七ウ) ひらけゆく すへたのもしき つじだうの みだ
のいほりに すむぞうれしき(八オ)〔本文ナシ〕(八ウ)

〔鎌倉名所和讃〕【81】※

こゝにかまくらのめいしよあり はせゑのかんのう二丈六大仏つ は
らのかんさまこんごろの てだまいしちからもち(九オ) ほしの井戸
にわこくうぞさん いいゝがはまに いならさきてんしさん 光明寺
やのね井戸 はちまんさま(九ウ) から みをあせば いちいの
とりゑに 二のとりゑ 三のとゑ よりともやしきハ 八丁子ほう
云ばあにせいかあります(十オ) あをとさいもん なめりかわ か
しわらやしきに 石のもん あさいなきりとし のほりがはんみち
(十ウ) げたじやあぶない せうだじやすべる とうせはやりの な
かぬきてそろりと(十一オ) 下だればなかけじぞゑ(十一ウ)〔本文
ナシ〕(十二オ) 高座郡藤沢町辻堂(十二ウ)

46 元祖しんぶじん始め／鈴木彦右衛門

元祖しんぶじん始め／鈴木彦右衛門【82】※

元祖しんぶじん始め 鈴木彦右衛門 明治十八年どり(一オ)〔本文ナシ〕(二ウ) 明治廿参年 篤信院积如海居士 寅四月十八日 相模国田大住郡豊田村 小峯 俗名 鈴木彦右衛門(二オ) 第七はんさがみの国 大すミ郡小ミねむら これハみなさん こゝにしとつゆらいがござる すゝきろうじん 彦右衛門(二ウ) こゝろたゞしき じつめいで ものにあハれみ ふかきしと あまたのしとに うやまハれ三ぜんにんの でしをもち(三オ) みちををしへし ちしきでも あハれなるかや むじようのかぜに さそハれて ちぎりふかき おやなでも(三ウ) のべまでをくる しとあれど のべよりさきハ われしとり はなのうてなに むらあきの けさやころもを うちめして(四オ) 六じのめうごう せなにしよい つゑをついて じゆづをてにあハれなるかや 百八ぼんのうの みとなりて(四ウ) くぜいのふねに うちのりて ごゑいかわさんの ほろかけて かんのもんせいしが かじをとり 十三ぶつの むかいにて(五オ) ごくらくじようどへ つきたもう ゑいかのはなハ さかれども なごりをしさよよハばんだいの ゆハのつき(五ウ) つきかけうせて いまよりも れんげのはなへと のりかへて ごくらくじようどゝ もうするハ 七主八主なる七どう(六オ) がらんやへざくら 京こゝのへに にをい

ぬる かないさん こうめうじ ほんぞん(六ウ) しよう観世音菩薩 おんたけ五尺 ぎやぎぼさつの おんさくにして かいさんどうぎしようにんなり(七オ) なにことも いまハかないの かんぜおん二せあんらくと たれかいのらん(七ウ) かたみにのこせし れいじようも あざやをろそかに をもうまい なかのたびしを さきにみてあとへのこせし れいじようも(八オ) ミハうつせみの あとやさきなみだにたどる ふでのつゆ せきだつむねを をししづめ(八ウ) こゝろばかしを かよハせて なむあミだぶつ あミだぶつ 藤沢町折戸 西山粗筆也(九オ)〔本文ナシ〕(九ウ)〔本文ナシ〕(十オ) 辻堂西 石井タカ(十ウ)

47 庚申わさん

庚申わさん【83】※

庚申わさん(一オ)〔本文ナシ〕(二ウ) きめうちよをらい かのゑさる わがちようゑんの そのゆへわ にんのをしどう にだいなるもんぶのていの おんどきに(二オ) しようこくにあくびよう をてはやり ろにやくなん によのへだてなく やまいのゆかに くるしめど いしもくすりも しるしなく(二ウ) むじよのかぜに さそわれて かなしやしでの ひとりたび こゝにつのくに てんをうじときのじうしよく みんなぎよを(三オ) じひしんふかき だいとくのせかいのなんぎを すくわんと なぬかいのりの けちぐわんに ふしぎやとしごろ にはちなる(三ウ) しようをめんどう しのあらわれ

て そうずにつけて のたまわく それわぼんてん たいしやくの
 つかいにきたる ものぞかし(四オ)このたびはやる あくびよをわ
 みなこれしよにんの のがれなき さんどくこよくの ぼんのをに
 つくりたてたる やまひなり しかしわせんかた(四ウ)なみだちて
 ついにくかいに しづむみを そうずのいのりの するしにわ びよ
 をどうりやくを あとうべし なをもひとつの ちかいあり(五オ)
 いちねんろくどの こうしんに しんくをきよめて よもすがら み
 なみにむいて てうあわし わがなをとのをる もろびとわ(五ウ)
 ごくあくぢうざい なるひとも このよわそくさい ゑんめいに み
 らいわさんずの くうをのがれ のぞむじよをどへ おゝじよし(六
 オ)ろくしんけんぞく ひちせまで ぶくわにすゝむと つげをへて
 こくうはるかに さりたもう ときにだいほう ぐわんねんの(六ウ)
 正月なぬかの かのゑさる はじめてにほん こくちうへ かうしん
 まつりを ひろめたり かゝるふしぎの みほんぐわん(七オ)しま
 にれいげん あらたなり つとめよとなへよ しんずべし なむしよ
 をめん こんごうそん 御多いかに げにいのる(七ウ)こゝろわか
 のへよいのそら うんわてんより さずけたもうぞ(八オ)(本文ナシ)
 (八ウ)

48 七福神和讃

七福神和讃【84】※

大正七年 七福神和讃 一月吉日(一オ)「本文ナシ」(二ウ)きみや

う てうらい 七福神 おんゑ はんじやの はじまりハ をやをう
 やまい こををもち ふうふ なかよく むつましく むびやうそ
 くさい かねこがね □れしも ねがハぬ しいない(二オ)□し
 ぜん ごんのう こうつめば おんゑハ ゆたかに くらすなり は
 なの おんゑに すハリいて いぬいの かたを ながむれば つる
 と かめとの らくあそび そのつる かめの もうするハ(二ウ)
 さつふれ こめふれ こがねふれ ふりたる たからを くらにつむ
 をくらの ばんハ たがなさる 一に 大こく にゑへす ほてい
 ふくろく じろうじん びしやもん てんも をたちより(三オ)べ
 なんてん さまの うつくしや 十二 しどゑの ひのはかま さかへ
 さくはな をめでたや おんゑの かぢりを ながむれば はしらは
 しらかね けたこがね あかぢね がはらに きんのとよ(三ウ)し
 がしハ きんまど ぎんすだれ きんの ひかりに あさひさす あ
 さひ ちよじやと うたハれて うたゑ 大こく まいゑへす をや
 くに たちやれ ふくのかみ をやくに たつのハ やすけれど(四
 オ)こがね つむとて ひまがない おんゑハ ますく、 ごはんじ
 やう(四ウ)高座郡藤沢町折戸 西山粗筆也(五オ)石井タカ(五ウ)

49 しんさいわさん

しんさいわさん【85】※

大正二年 しんさいわさん(一オ)「本文ナシ」(二ウ)きみようち
 よらい かんとうの こゝにあハれを とどめしハ としハたいしよ

う 十二年 九月いちぢつ ひるのころ(二オ)しんざいをこりし そ
のときハ わづかにふんか さんふんで とうきよ よこはま みな
つづれ あはれなるかや そのときハ(二ウ)いゑのしたらや はり
のした いしやれんがに はさまれて そのなくこへの かなしさハ
かなしさほねみを とふすなり(三オ) そのときはツぽふ ひになり
て みづせめひせめの なさけなや こゝにあはれハ よこはまの
しようきんぎんこや こふゑんの(三ウ)いけのなかやら まちくゝに
しがいのかずハ すふしれず わけてあはれハ とうきよの ほん
じようほうの ひふくじよう(四オ)をくのひとくゝ あつまりて
こゝぞひなんと をもふまに をしくるもふかの そのためこ
よからなる ちごくせめ(四ウ)たすけたまへや みだによらい あ
らをそろしや ひふくじよう しがいのやまを つみにけり このよ
にのこりし(五オ)ひとくゝハ しゝたるしとを をもいやり あさ
なゆうなに ぶつぜんに ゑこうをたむけて しんすべし なむやだ
いひの(五ウ)かんぜおん なむあみだぶつ あみだぶつ 高座郡 海
老名村望地 念仏信者 岡木柳助(六オ)〔本文ナシ〕(六ウ)

50 せいとうかんらくわさん

せいとうかんらくわさん【86】※

大正四年 せいとうかんらくわさん 三月記念(一オ)〔本文ナシ〕(一
ウ)きみやう てうらい ひのもの ほまれも せかいに かゞや
いて こんど このたび せいやうに おこりし じけんが もちあ

がり ついに どれいつの かいせるハ(二オ)せかい あいての大
せんそう 日本も にちゑい どうめいで ときハ 大正 三年の
八月 二十 三日にハ にちどく せんそう はつぶたい(二ウ)こ
うしう わんを ほうさする だいに かんたい しいいかん かと
う さだきち ちうじやうの わがかん たいの いさましや あけ
て 九月の 二日にハ(三オ)またりく ぐんの へいたいも さん
とう はんとうに じやうりくし さしもに むばる どれいつへい
いまじや 日本 の いきをいに をそれて にげこむ せいとうへ
(三ウ)ひゞに にほんの ひこうきハ たいそう たかく とびま
わり てきの やうすを さぐりてハ ばくだん とうかの ものす
ごや じゆんびハ できて 十月の(四オ)三十一日 天ちやうせ
つ そうこう げきも はじまりて てきと みかたの うちいだし
大づゝ ころゝの ときのこへ てんちも われる 大せんそう(四
ウ)せいとうそうとく わる で つく いまじや たまつき
かてぬきで めだまを むいても かなうまい 十一月の 七日
にハ いるちす (文新書行ニイルチス) もるとけ モルトケ びすまるく(五オ)いのちと たの
む ほうだいも 日本 の ひのまる ひるがへる ようじん けんご
な せいとうも なんなく こゝに かんらくし こうげき ぐんの
しいいかん(五ウ)かみを ちふじやうの 大てがら ひゞの でん
ぼう こうがいだ ちやうちん ぎやうれつ ばんばんざい 日本
ていこく おめでたや(六オ)せいとうのはなとちりにし ものの
ふの あとをとむらへ このよのちのよ(六ウ)

〔俵藤太秀郷〕【87】※

さいこく十三ばんに くにハあふみのしがごほり こゝにひとつのめ
いしよあり せたのからはしからかねぎほし みづにうつるハせゞの
しろ(七オ) むかうにみわたすむかでやま たわらとうだひでさとが
一のやはなせばはねかへし 二のやにつばをつけられて ゆりとめら
れたるおゝむかで(七ウ) これハところのめいしよなり てらべむら
せきこんざん いしやまでら(八オ)〔本文ナシ〕(八ウ)〔本文ナシ〕
(九オ) 藤沢町海岸通り 辻西 石井タカ 所有(九ウ)

51 〔せいとうかんらくわさん〕

〔せいとうかんらくわさん〕【88】※

〔本文ナシ〕(二オ)〔本文ナシ〕(二ウ) きみやう てうらい ひのも
との ほまれも せかいに かゞやいて こんど このたび せいや
うに おこりし じけんが もちあがり ついに どのいつの かいぜ
るハ(二オ) せかい あいての 大せんそう 日本も にちゑい ど
うめいで ときハ 大正 三年の 八月 二十 三日にハ にちどく
せんそう はつぶたい(二ウ) こうしう わんを ふりさする だい
に かんたい しれいかん かとうさだまち ちうじやうの わがか
んたいの いさましや あけて 九月の 二日にわ(三オ) magariく
ぐんの へいたいも さんとう ほんとうに じよりくし(マセ) さしも
に ゐるばる どいつへい いまじや 日本 の いきをいに をそれて

にげこむ せいとうへ(三ウ) ひゞに にほんの ひこうきハ たい
そう たかく とびまわり てきの やうすを さぐりてハ ばんた
ん とうかの ものすごや じゆんびハ できて 十月の(四オ) 三
十 日 てんちようせつ そうこう げきも はじまりて てきと
みかたの うちいだす 大づゝ こづゝの ときのこへ てんちも
われる 大せんそう(四ウ) せいとう そうとく ワルデツク いま
じや たまつき かつてきて めだまを むいても かなうまい 十
一月の 七日 にハ いるちす(イルチス) もるとけ(モルトケ) びすまるく(ビスマルク) いの
ちと たのむ ほうだいも 日本 の ひのまる ひるがへる よんじ
ん けんごな せいとうも なんなく こゝに かんらくし こうげ
き じんの しれいかん(五ウ) かみを ぢやうぢやうの 大てがら
ひゞの でんぼう ぎうがいで ちやうちん ぎやうれつ ばんばん
ざい 日本 ていこく おめでたや(六オ) はんかい(はんかいのみまき) せいとう
のはなとちりにし ものゝふの あとをとむらへ このよのちのよ
(六ウ)

〔俵藤太秀郷〕【89】※

西国十三ばんに国ハあふみのしが郡 こゝにひとつのめいしやうあり
せたのからはし からかねぎほし みずにうつるは せゞのしろ む
かうにみハたす むかでやま(七オ) たわらとうだ ひでさとが 一
の矢 はなせバ はねかへし 二矢に つばを つけられて ゆりと
められたる 大むかで これハ ところの めいしよなり(七ウ)

てらべむら せきこんざん いしやまてら 著作人 久良岐郡 金沢
加間利谷(八才)〔本文ナシ〕(八ウ)〔本文ナシ〕(九才) 石井タカ(九
ウ)

52 つるかめ和讃

つるかめ和讃【90】※

大正七年一月四日 つるかめ和讃 藤沢町辻堂 石井タカ(一才)〔本
文ナシ〕(二ウ) きみようてうらい つるとかめ ばんしうたかさこ
まるがめの いけのみぎわの つるとかめ(二才)つるとかめとの お
さかもり そこでつるさんの もうすには これく もうし かめ
さんよ(二ウ) さげのうえでは あるけれど ふうふに ならうじや
ないかいな ふうふになるのは わしやいやよ(三才) ゆはれてつる
さんの くぜつには くびのながいのが いやなのか くびのながい
は いやじやない(三ウ) あしのながいのが いやなのか あしのなが
いのも いやじやない そこでかめさんの いふことに(四才) ふう
ふになるのは よけれども おまへのじゆみよふは せんねんよ わ
たしの じよみよふは まんねんよ(四ウ) おまへのはてたる その
あとで ひとりでくらすは わしやいやじや みづでくらすは よい
わいな(五才) そくしんじようふつ なむあみだ(五ウ)〔本文ナシ〕
(六才)〔本文ナシ〕(六ウ)

53 ほうねんわさん

ほうねんわさん【91】※

ほうねんわさん つじどう 石井たか(一才) ほうねんわさん(一ウ)
そほふそふだよ そうだよそふだよ ことしや よがよい(二才) ほ
ふねんどしよ みちを はさんで はたいちめん(二ウ) むぎがほ
がでる なわはなざかり ねむる てふくに とびだすひばり(三才)
ふくや はるかぜ たもとが かるい あちら こちらに くわつむ
をなご(三ウ) ひましくに はるごがふとる ならぶ すげがさ
すゞし こへ(四才) うたい ながらも うへゆく いねも なが
い なつひも いつしかくれて(四ウ) うへる てさきに つきかけ
うつる かいりる みちくく あとみかれば(五才) はずへ はずへ
によつゆがひかる 二百 十日も ことなくすんで(五ウ) むらの
まつりも たいこがひづく いねは ほうさく みのりもよくて(六
才) かりて ひろげて にちくほして こめに こなして たわら
にいらて(六ウ) かない そろうて いかいの ゑがを まつを ひ
にたき ゆるいの そばで(七才) よわよも やまの はなしが は
づむ はづが てぎわの だいこんなます(七ウ) これが いなかの
としこしきかな のめよくくと をさいつさいつ(八才) かない そ
ろうて めでたく くらす

こゝわさん【92】※

こゝわさん(八ウ) きみやうちよらい かんぜをん ひとゝうまれ
 し ひるしにわ(九オ) こをこつくせよ をやをへ^こ ふたりのをやよ
 り よのなかに(九ウ) とをときかみハ ましまさず みのゆへだい
 じに はたらいて(十オ) をやにらくさせ やしなへよ よみかきす
 るも ぬいはりも(十ウ) もとをわするな をやのをん いつのよま
 でも ふたをやの(十一オ) ごぶじでながいき いのるべし むりと
 をもうな はらたつな(十一ウ) をやのいけんヲ そむくなよ なさ
 けの うみの をやよりも(十二オ) ぎりあるをやが だいじぞよ
 下(十二ウ) なむやほんしの しやかによらい だいしもなをらぬ あ
 くみやうも(十三オ) をやのいけんで なをすべし こひのふちせに
 みをすてな(十三ウ) をやよりうけし このからだ としのようれし
 をやをやの(十四オ) ごしやうすゝめて てらまいり なむあみだぶ
 つ あみだぶつ(十四ウ)〔本文ナシ〕(十五オ) タカ(十五ウ)

54 もちづつくし/じとをこばくれ口

〔もちづつくし和讃〕【93】※

大正拾四年 もちづつくし じとをこばくれ口 石井(一オ)〔本文ナシ〕
 (一ウ) これハいちぎの みなさまよ もちづつくしにて このやをん
 ゑを ゆはいます(二オ) くにハばんしゆう たかきこの をのへの
 まつで うすをほり 一月二日が(二ウ)つきぞめに もちをつき あ
 づきついたら あんこもち たいこをろしの(三オ) からみもち き
 なこついたら あべかもち このやのだんなさん をかねもち(三ウ)

をかみさまハ いつもにこゝこころのまるい そないもち とう
 ざもろうた(四オ) はなよめさまハ すこしやをやへの きかねもち
 くすしやうふなかよく するこもち(四ウ) できたそのこハ ひめこ
 もち まごひこやしやごの だいまでも をんゑハつゞいて(五オ)
 ごふくもち みなさまをすきの ぞうにもちで とどめをく(五ウ)

〔曾我兄弟和讃〕【94】※

松田ふし坂東五ばんのく これは一ざの みなさまアまアよ こゝにひ
 とつの いれよ^こあり(六オ) ひとハ一だい なハまつせ そがきよ
 うたいハ なもたかき あにの十郎(六ウ) おとうと五郎 ふかきし
 さいわ はゝうへが ねものがたりの たひごとに(七オ) きいてき
 ようだい むねせまる みごとにかたきを うちたいと いゝずみさ
 んに(七ウ) がんをかけ たすけたまへや かんぜをん よにもなだ
 かき とらごぜん(八オ) そがの十郎に みをよせて ふうふやくそ
 く にせのゑん ゆいがはまにて(八ウ) きようだいわ すでにてう
 ちに なるところ しげたゞさまに たすけられ(九オ) むりのくだ
 うハ ふじのすそ よりともこうの まきがりに 一とよばれた(九
 ウ) はたがしら なくもわらうも きよかぎり はゝにいとまを つ
 げられて(十オ) そがなかむらを たちいでる やよいもすぎて さ
 みだれの ころハ五月の(十ウ) さつきやみ かりバクを たつね
 られ こゝハするがの ふじのやま(十一オ) くだうハてんまで あ
 がるまい 七ごう五しやくが 八ごうめ とうとくとくに(十一ウ)

めぐりあい とらしようしよの てびきにて しびよくかたきを
うちたもう (十二オ) これハかんをんほさつの りやよくなり (十二
ウ) (本文ナシ) (十三オ) (本文ナシ) (十三ウ) (本文ナシ) (十四オ)
(本文ナシ) (十四ウ)

55 ゆめわさん

ゆめわさん【95】※

ゆめわさん (一オ) (本文ナシ) (一ウ) きみようちよらい はつゆめ
に ごくらくじよどの ゆめおみた ホイ はんじておくれよ よ
めごどの はんじてあげます ははさまよ (二オ) 七十七でわまだは
やい 八十八のゆはいまで 百年まちかく いらせられ 九十九年の
三月の さくらはなの さかりまで (二ウ) もしもおねむく なう
たなら そのときこそわ とめわせぬ それからころろで したくし
て 四ほんのはしらお たてまわし (三オ) きんらんどんすの まく
おはり うへにわてんがい はなかごで まよけのはしらお よこに
たて あやにしきの はだおたて (三ウ) ろくじのみよごう かきそ
ろい あみだみよらいの てびきにて ごくらくじよとへ すらすら
と なむあみだぶつ あみだぶつ (四オ) (本文ナシ) (四ウ) (本文ナ
シ) (五オ) (本文ナシ) (五ウ) (本文ナシ) (六オ) 石井タカ (六ウ)

〔訂正〕本稿と目録では※を付した【81】く【95】までの収録和讃番
号、および、45 お茶和讃 の丁数に相違があるが、本稿を正とし、

訂正したい。

〔付記〕末筆ながら、貴重な資料の閲覧・紹介を許可してくださった
石井二郎氏に深謝いたします。本稿は平成二十五年度、笹川科学研究
助成金事業 (研究番号 25-115) による成果の一部です。

(くめしおり 大学院後期課程卒業生)